

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

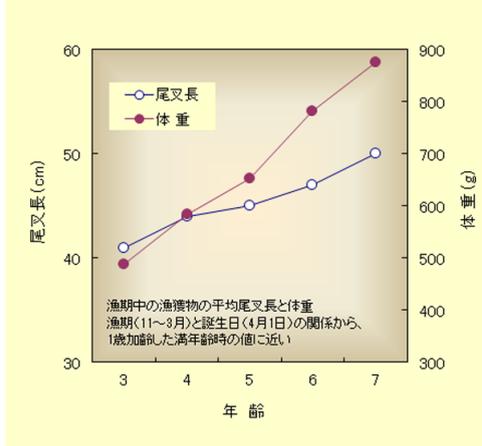
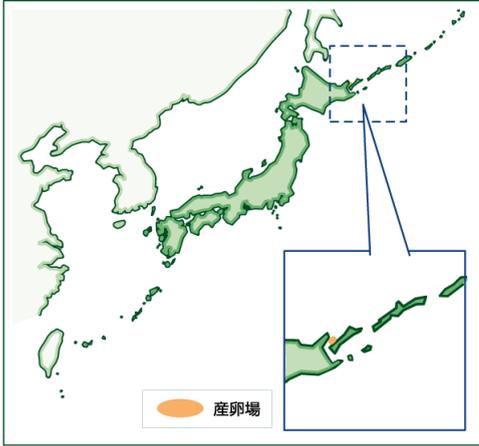
系群名 根室海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明(10歳以上)
 成熟開始年齢: 3歳
 産卵期・産卵場: 冬季(1~4月)、根室海峡
 索餌期・索餌場: 産卵期以外は、オホーツク海西部と推測されるが未解明の部分が多い
 食性: オキアミ類、カイアシ類をはじめとする浮遊性小型甲殻類、本海域では、冬季に魚卵及び魚類を捕食している個体が多い
 捕食者: 海獣類

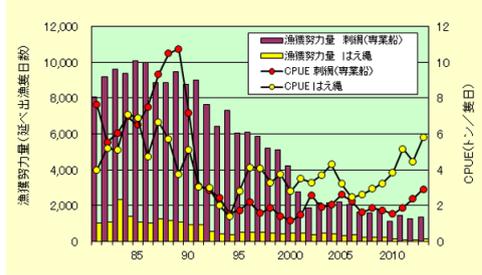
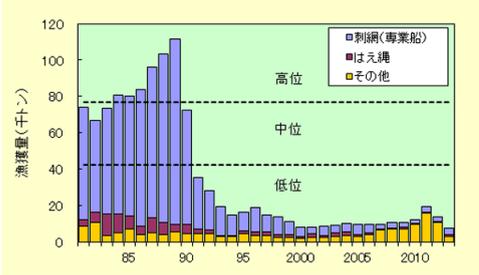


漁業の特徴

本海域では、刺網やはえ縄などの漁業によって漁獲されている。操業期間は、はえ縄が11~1月、すけどうだら刺網の専業船が1~3月、その他刺網が4~12月である。漁獲量の集計範囲は、近年の漁獲動向を考慮し、2010年度までは別海地区~羅臼地区とし、2011年度以降については、これらにさらに根室市内(落石地区を除く)の底建網および小定置網の漁獲量を加算した。なお、隣接する海域ではロシアによる操業が行われている。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代は増加傾向を示し、1989年度に最高の11.1万トンに達した後、急激に減少し、2000年度には1.0万トンを下回った。その後、漁獲量は0.8~0.9万トン前後で推移した後、2008年度には再び1.0万トンを上回り、2011年度は1.9万トンに急増した。2012年度以後漁獲量は減少し、2013年度の漁獲量は過去最低の0.8万トンであった。なお、漁獲量は漁期年(4月~翌年3月)で集計した。

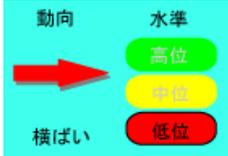


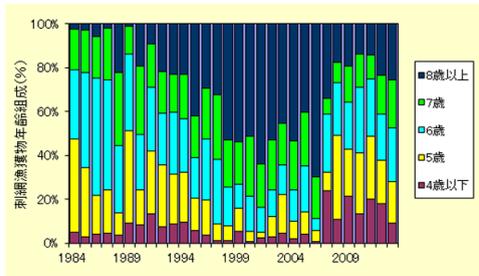
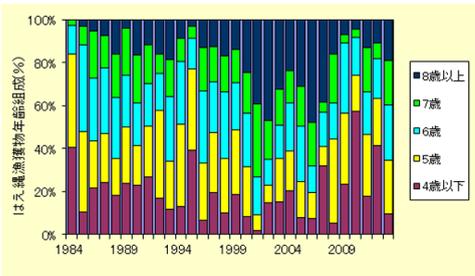
資源評価法

日本漁船における漁獲量やCPUE、漁獲物の年齢組成が情報として得られている。一方、隣接する海域におけるロシア漁船の操業や漁獲物については断片的な情報しか得られていない。そのため、当該資源については既存の情報からは資源量の算定が困難であり、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定といった定量的な評価は行うことが出来ない。そこで、日本漁船による漁獲量やCPUE、漁獲物組成などを元に資源状態を推測した。

資源状態

総漁獲量を用いて資源状態を判断した。1981~2013年度の33年間の漁獲量の最大値11.1万トンと最小値0.8万トンの間を3等分して高・中・低水準とし、2013年度の漁獲量0.8万トンを低水準と判断した。また動向は2009~2013年度の漁獲動向から横ばいと判断した。なお、従来の主漁期である産卵期に行われている刺網(スケトウダラ専業船)およびはえ縄のCPUEは、近年5年間では増加傾向にある。





管理方策

当該資源は日本とロシア双方により漁獲されているが、ロシア側の詳細な操業形態は不明である。また、その生態も不明な点が多く、資源評価に必要な情報は限定的であり、資源量推定や来遊予測は困難である。これらのことから、当該資源についてはABCの算定は行わず、参考値としての算定漁獲量を提示することとした。2015年度算定漁獲量は、ABC算定規則2-2)による $0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.79$ とその予防的措置である $0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.79$ から算定した。

漁獲シナリオ (管理基準)	F値 (F_{current} と の比較)	漁獲割合	将来漁獲量		評価	2015年度 算定漁獲量
			5年後	5年平均		
資源の状態に 合わせた漁獲 ($0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.79$)	—	—	—	—	—	75百トン
資源の状態に 合わせた漁獲の 予防的措置 ($0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.79$)	—	—	—	—	—	60百トン

コメント

- 本評価群については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定など、定量的な評価は行っていない。しかし、参考値として算定漁獲量を提示した
- 当該資源の算定漁獲量の算定にはABC算定規則2-2)を用いた
- 本海域のスケトウダラは主に産卵回遊群を対象にした漁業であり、日ロ両国で行われている
- 我が国の漁業による漁獲動向から、資源水準は低位と推測されることから、資源回復を図る必要がある
- 平成23年に設定された中期的管理方針では「ロシア連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする。」とされている
- δ_2 はCtに3年平均を用いる場合の低位水準の標準値0.7、Ctについては当該資源は近年来遊状況に変化が認められ、また来遊量の変動も大きいことから直近3年間(2011～2013年度)の平均漁獲量(Cave)とした
- γ_2 は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ から求められ、kは係数(標準値の0.5)、bは漁獲量(直近3年間)の傾き、lは漁獲量の平平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 漁獲量は最盛期の1割程度の水準で低迷しており、資源水準は低位
- 2009～2013年度の漁獲量の推移から、動向は横ばいと判断

管理方策のまとめ

- ABCの算定は行わず、参考値としての算定漁獲量の提示とした
- これ以上の資源減少を食い止めることを管理目標とする必要がある
- ロシア側の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシア側もTACを設定して漁獲規制を実施している

執筆者: 田中寛繁・千村昌之・山下夕帆・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。